

■ 論文 ■

■ 仲 嶺 真 信 ■

(別府大学教授)

會津八一と大分の石仏 — 大正十一年間における古美術遍歴を中心に —

はじめに

會津八一（以下會津）は明治生まれであり、歌人・書家としては勿論、またいち早く奈良美術研究を行った美術史家としても有名である。しかし、會津が、本格的な研究に打ち込み広く美術史家として知られるようになったのは昭和に入ってからである。厳密に言えば、少なくとも大正十五（昭和二年）年の四十五歳の時、早稲田大学文学部講師に再任された以降のことである。それ以前の大正期は、ほぼ早稲田大学・早稲田中学において英語を担当する教員として勤務していた。しかし大正十年以降、とりわけ大正十一年それまで勤務していた早稲田中学の教頭職を辞し平教員に戻った頃（大正十一年七月五日早稲田中学校教頭を辞任）から、関西・中国・四国・九州への幾たびの旅行が目立ち、中でも大和を方葉調で詠んだ歌が増え、一方ではいち早く奈良美術研究の萌芽が見える。ちょうどその旅に明け暮れていた頃の一時期、集中的に大分の石仏、とりわけ臼杵石仏の研究に関与していたことが、會津自身の書簡において垣間見ることができる。いうまでもなく、會津の主要な美術史研究が、「奈良狂^{*}」と自称するほど専ら奈

良に傾斜していたために、その研究が本格化する以前の大正期における美術史研究に関しては寡聞にして知らない。とりわけ拙稿は、大正十一年頃に會津が強く関心を抱いた「石のほとけ」の問題に焦点を当てて考察を試みるが、この時期はとりもなおさず、會津が昭和に入って本格的に美術史研究を開始する以前の基礎的段階に位置する。ちなみに山本健吉は、會津が、趣味の域を脱し研究に踏み切ったのは、大正十一年のことと指摘している^{*2}。まさにこの年、會津は「(前略) 経歴するところの仏刹數十、過眼するとところの仏像数百、道人近來の一事業なりき(後略)^{*3}」と仏像への並々ならぬ接近度の高さを記す。さらに「(前略) 只今の小生には只だ石の仏の先づ心をひくのみにて候(後略)^{*4}」と述べており、すなわち石仏に強く関心を示していることが判明する。この時期は、後述のように臼杵石仏に関する研究史上においてもきわめて重要な段階にあり、それに関して會津はすでに先見性を持った卓見を開陳している。

ともあれ、會津が早稲田大学において東洋美術史学会を創立し、その会長の任に就くのは、昭和五（一九三〇）年五十歳の時であることからして、このことはまさに瞠目に

値する。さつそく、次に従来あまり注目されてこなかった大正末年以前における會津の石仏調査を浮き彫りにするために、まず先に會津の人物に関する一般的説明を紹介することにする。

I 事典による「會津八一」について

ここでは、會津について概説的に紹介することにするが、一例として『仏教美術事典』の当該項目を典拠としながら、會津の美術史研究の軌跡を検討して見よう。

『会津八一……一八八一—一九五六』…新潟生まれ。美術史家。一九二六（大正十五）年早稲田大学講師として東洋美術史を講じ、三一（昭和六）年教授に就任、同大学に美術史専攻の基礎を拓いた。古美術研究誌『東洋美術』の編集を指導し、自らも正倉院、法隆寺、古瓦の名称など奈良美術に関する論文を発表した。一九三三（昭和八）年にそれまでに発表した論文などとともに法隆寺再建に関する『法隆寺 法起寺 法輪寺建立年代の研究』（東洋文庫）を著し、翌年当論文をもって学位論文として早稲田大学より学位を受けた。また、教育・研究資料として中国古代美術品・書籍の収集と古文獻の公刊に務め、実物作品と文獻史料よりなる美術史学を提唱・実践した。当時収集した資料は、その後設立された會津博士記念東洋美術陳列室に保管

されることとなった。なお、歌人・書家としても有名で、
渾斎、秋艸道人と号した（川瀬由照）^{*5}。

人物記事を一つだけを挙げたが會津に関して、このほかの事典^{*6}の場合も大正期の美術史調査や研究について触れた箇所は見いだせない。よって拙論においては、大正期の白杵石仏の研究調査の歴史を踏まえつつ、特に大正十一年に會津が行った調査研究に焦点を当てて以下に考察を進めていくことにする。

II 大分の石仏に関する研究調査の歴史と會津八一

1. 大分の石仏に関する研究調査史

日本で最初に白杵石仏に関する紹介と論文を公表したのは、小川琢治である。すなわち、大正二年別府にて開催された夏期講習会を契機に訪問と踏査を試みている。その成果は、大正三年に写真集『日本石仏小譜』（私家版）が刊行され、また同年論文「九州の石仏」^{*7}について『国華』にて連続紹介し、また天沼俊一は建築学的見地から「深田の石塔」^{*8}について、また大正六（一九一七）年大村西崖は「大分県下の古石仏に就いて」^{*9}として紹介している。

大正七（一九一八）年、帝室博物館・文部省古社寺保存会から派遣された新納忠之助は、白杵石仏に言及する中で、

大分県は「石仏の国」「実此地は法界の浄土」¹⁰と賞賛している。一方、同年五月大村西崖『東洋美術史大観 第十五 彫刻部』¹¹は、白杵石仏に関する四葉の写真について当時の国宝級作例と同等の格別な扱いで掲載している。

ちなみに大正八（一九一九）年、和辻哲郎『古寺巡礼』が刊行され、古美術に関する関心が一段と強まりつつある中、大正九（一九二〇）年には以下の二者が共同で紹介を試みている。すなわち、大村西崖「豊後磨崖石像 ― 帝国美術院にて調査に着手す―」、中村不折「日本第一の石仏と其の保護に就いて」¹²。大正十年には、田口掬汀「泉都から磨崖仏へ」¹³、天沼俊一「満月寺址の石塔及板碑」、小林正義「満月寺の磨崖石仏像に就いて」、中村不折「白杵の磨崖石仏像に就いて」、新納忠之助「磨崖石仏に就いて」¹⁴等が発表され、また同年に小野玄妙と岡田三郎助が美術院から派遣され大分の石仏調査を行い、その結果、岡田三郎助「大分石仏の系統」¹⁵、さらに大正十二年には小野玄妙「大分の石仏に就て」¹⁶が公にされている。

ともあれ會津が大分の石仏に強く関心を示した時期の大正十一年までには、大分の石仏に関する認知がかなり高まり、上記のような密度をもって石仏調査が展開されていた。會津も又まさにこの流れに沿って、大正十一年に集中的に関西・四国等を経て九州歴訪を重ねていたことになる。會津の書簡にも当時、會津自身の他にも行われた石仏視察が触れられているが、大正十一年に白杵石仏視察

を行った方々は次の通り、濱田耕作・澤村専太郎、塚本靖、小小木忠七郎、黒板勝美、大谷尊由等¹⁷の歴々が見られる。

2. 會津八一の研究調査の契機

ところで、會津がいかなる理由で九州の古美術、とりわけ大分の石仏に関心を抱いたのであろうか。それは、ちょうど會津が南都逍遙に大きく傾斜していた頃に、先述のように中央の官僚・学者・美術家・修復家による白杵石仏の紹介や調査研究の成果が、きわめて特殊な扱いを受けて公表され始めていたからである。さらには、そのような中でも、奈良在住の写真家・工藤利三郎（以下、工藤と記す）と出会ったことが最も重大な契機となっている。工藤は、すでに大正十年四月『豊州磨崖石仏 日本精華・第九輯』¹⁸を刊行していた。折しも會津は、その写真集を見ているものと推測される。すなわち、大正十年十月の坪内逍遙宛書簡において、次のような白杵石仏に関する記述が確認される。

〔前略〕大和路の諸仏は皆な知己なれば、慈眼を以て病軀を迎えくれらるべしと存じ候。九州へ御いでなされ候はゞ、大分県別府にちかき満月寺の石仏像を御覽被下度候。小生は写真にて一見したるのみに候。此所のみならず同県下にはだいぶ石仏の散在するものあれど、相距ること遠く巡歴に便ならざるが如く被存候。

たゞ此所は最も代表的のものなるが如く、弘仁期の傑作と称すべきものも認められ候やうにて候。伝説には日羅の作と申候よしなれども、其様式によれば全くとるに足らずと存候。又先日（最近に）矢張り大分県佐賀県にて支那式の千仏を発見せしよし、いまだ其処をたしかめおかず候へども、彼地の物識に御たゞしの上御一見の御土産漸最も持ち上げ奉り候。洞窟の壁面に彫刻したるものと相見え候。敬具¹⁹」

ここで會津は「満月寺の石仏像」と表記するが、これは現在の「白杵石仏」を示すものであり、その写真を一見したことに触れている。また、白杵石仏の作者と年代に関しては、様式から日羅説を退け、弘仁期の造立と見られる旨を紹介しているが、これは当時の先行する大村西崖（日羅説支持、養老前後期）や田口掬江（日羅説否定、藤原期）とも異なり²⁰、會津独自の見解となっている。

ところで、先述の工藤について、會津は「写真屋の爺さん甚だ頑固²¹」、あるいは「変屈爺²²」とも述べているが、これは工藤の性格を端的に示している。なお會津は、亀井勝一郎との対談において、工藤と淡島寒月が親友であるが故に工藤を訪ねたことについて触れている²³。

さて會津は、もともと奈良とは縁が深く、明治三十九（一九〇六）年早稲田大学卒業後、すでに早くも明治四十一（一九〇八）年、初めて奈良地方へ旅行している²⁴。この時

はもつぱら古寺巡礼を重ねながら、万葉調の和歌を詠み綴っている。後年の昭和に入つて奈良美術研究を本格的に開始するが、実はこの時まですでに、独学によつて仏像・古美術をはじめ奈良に関する造詣が深化していた。実際、奈良への憧憬とその研鑽の経緯は、後年、幾度も繰り返される「奈良詣で」に顕著に表れている。

會津の奈良逍遙と歌作りに拍車を掛けたのは、大正九年（一九二〇）年日本希臘学会を創立し、同会長となつてから以降のことである。すでに大正八年には、早稲田大学英文学科講師を辞任し、郷土玩具の蒐集と研究に努めていた。そして、大正十（一九二二）年會津四十一歳、まさに運命の時がやってくる。書簡には、目立って頻繁に奈良詣が見られ、きわめて重要な出来事が折り重なつて記述されている。早速その年譜資料の書簡概略を次に紹介しながら、その特色について述べていくことにする。

3. 大分の石仏についての調査研究関連事項と會津八一の行動（大正期）

大正期における白杵石仏についての調査研究関連事項と會津八一の巡歴については、以下の一覽表にまとめた。

年月日	會津八一全集	調査・研究者 古寺探訪	調査・研究・事柄(成果)	備考
大正3年		小川琢治	写真集『日本石仏小譜』(私家版)刊行	個人刊行
大正3年 8月	年譜(巻12)	會津八一	「秋神堂学規」四則をつくる	
大正5年 6月5日		天沼俊一	「深田の石塔」	『考古学雑誌第六巻 第十号』考古学会
大正6年 9月15日		大村西崖	「大分県下の古石仏に就いて」	『美術之日本9-9』 審美書院
大正7年 3月23日	年譜(巻12)	會津八一	早稲田中学校教頭に就任	
大正7年 4月		新納忠之助	調査	帝室博物館・文部省 古社寺保存会 小城長郎『深田の石 仏』以下『深田』
大正7年 5月		新納忠之助 大村西崖	「磨崖石仏に就いて」後掲 『東洋美術大観 第15 彫刻部』	* 発表は大正10年 4月11日 審美書院
大正8年 5月23日		和辻哲郎	『古寺巡礼』	岩波書店
大正9年 8月1日		大村西崖 中村不折 朝倉文夫	「豊後磨崖石像-帝国美術院にて調査に着手す-」 「日本一の石仏と其の保護に就いて」 「豊後美術史の研究を提唱す」	『美術写真画報 一 ノ七』博文館
大正9年 9月	年譜(巻12)	會津八一	日本希臘学会創立。会長:會津八一(40歳)	
大正9年 12月28日	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一 (40歳)	東京→奈良、29日法隆寺村泊。 30日中宮寺、大阪伊遠俊光宅泊。 31日当麻寺、法華寺、二月堂、夢殿。	* 坪内逍遙宛書簡
大正10年 1月4日	書簡(巻8) 和歌多数詠む	會津八一 奈良詣で	法輪寺、法隆寺、中宮寺、海王龍寺、当麻寺、 法華寺、淨瑠璃寺等	* 坪内逍遙宛書簡
大正10年 4月1日		田口鞠江	「京都から摩崖仏へ」	『中央美術7-4』 日本美術学院
大正10年 4月11日		天沼俊一 小林正義 中村不折 新納忠之助	「満月寺址の石塔及板碑」 「満月寺の磨崖石仏像に就いて」 「白杵の磨崖石仏像に就いて」 「磨崖石仏に就いて」	『仏教美術第一巻第 三号 大分県満月寺 磨崖像乃研究』仏教 美術社
大正10年 4月20日		工藤利三郎	写真集『豊州摩崖石仏 日本精華・第九輯』	日本精華社
大正10年 8月19日 - 9月11 日		小野玄妙	宗教大学教授・小野玄妙、岡田三郎助と共に 帝国美術院から石仏調査のため派遣。* 9月 8日「福岡日日」に帝国美術院調査の記事。 * 9月20日、岡田三郎助「大分石仏の系統」	『深田』 * 小野玄妙『大分の 石仏に就きて』帝国 美術院 大正12年 3月刊行
大正10年 8月11-21	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一 奈良詣で	東大寺、新薬師寺、薬師寺、法隆寺、橘寺、 室生寺、大野寺(弥勒大石仏)等。	安藤更生、山田正平、 吉武正紀同伴

大正10年 10月13日	書簡(巻8)	會津八一	満月寺石仏写真を一見 又先日(最近に)満月寺の石仏像、佐賀県にて千仏発見	勝浦より逍遙宛書簡
大正10年 10月19-29日	年譜(巻12)	會津八一 奈良詣	十輪院、法隆寺金堂壁画、栗師寺、唐招提寺、菅原寺、秋篠寺 滝坂、地獄谷聖人窟石仏、春日石仏群等、河内観心寺、聖徳太子墓参、十輪院(伝魚養墓)、福智院。	東京→伊勢・鳥羽→笠置→日吉館 小川晴暁を見出す
大正10年 11月16-20日	年譜(巻12)	會津八一	雨天のため正倉院開扉せず。 自性寺の大雅堂を見、別府に至る。	東京→大阪→奈良→大阪(天龍丸)→門司→中津→別府 *浜路海岸の立花屋別荘を宿舎とす
大正10年 11月22日	年譜(巻12)	會津八一	大分市上野元町の石仏群	
11月27日	年譜(巻12)	會津八一	地獄めぐり、鬼の岩屋	
11月28日	年譜(巻12)	會津八一	大分中学校、上野元町の石仏群再訪、東植田村の石仏	
11月30日	年譜(巻12)	會津八一	白樺の満月寺遺蹟を見る	
12月3日	年譜(巻12)	會津八一	大分県菅尾村の石仏を見、菅尾駅より犬飼駅をへて竹田に至り宿泊	
12月4日	年譜(巻12)	會津八一	竹田より別府に戻る	
12月12日	年譜(巻12)	會津八一	別府を出で耶馬溪に入る	
12月13日	年譜(巻12)	會津八一	耶馬溪へ行く。柿坂泊	
12月14日	年譜(巻12)	會津八一	大宰府に入り、観世音寺、戒壇院、都府楼址、天満宮、同地に泊る	
12月15日	年譜(巻12)	會津八一	福岡の知人宅に泊る	
12月16日	年譜(巻12)	會津八一	福岡市東光院本尊等。博多を南下、木葉駅下車、木葉神社、熊本経山八代駅下車、日奈久温泉柳屋に宿る	
12月23日	年譜(巻12)	會津八一	日奈久町発、入吉町林温泉翠嵐楼に泊る	
12月25日	年譜(巻12)	會津八一	海路茂木に上陸し長崎入り。福濟寺、同地大宝館に泊る	
12月26日	年譜(巻12)	會津八一	崇福寺、午後長崎発。	
12月27日	年譜(巻12)	會津八一	厳島神社、大願寺、広島経山海路尾道に至り、同地に泊る	
12月28日	年譜(巻12)	會津八一	浄土寺、西国寺を、午後尾道出帆	
12月29日	年譜(巻12)	會津八一	大阪着、伊達俊光宅に泊る	
大正11年 1月1日	年譜(巻12)	會津八一	大阪伊達俊光宅にて新年	
大正11年 1月2日	年譜(巻12)	會津八一	奈良へ行く。日吉館泊	

大正11年 1月4日	年譜(巻12)	會津八一	小川晴暘を伴い、地獄谷へ行く。春日石仏撮影	
大正11年 1月5日	年譜(巻12)	會津八一	小川を伴い、洞が楓の石仏撮影	
大正11年 1月13日 -14日	年譜(巻12)	會津八一	大阪発、14日、高知着、知人宅泊	
大正11年 1月15日	年譜(巻12)	會津八一	五台山の竹林寺、吸江寺を見学。17日、高知校友会の大隈重信追悼式に臨む。宗安寺の四天王像をみ、朝倉神社に参す。19日、高知出帆、20日、宿毛着、同地に泊る。	
大正11年 1月17日	年譜(巻12)	會津八一	17日、高知校友会の大隈重信追悼式に臨む。宗安寺の四天王像をみ、朝倉神社に詣す。	
大正11年 1月19日	年譜(巻12)	會津八一	19日、高知出帆	
大正11年 1月20日	年譜(巻12)	會津八一	20日、宿毛着、同地に泊る。	
大正11年 1月22日	年譜(巻12)	會津八一	宇和島着、鶴屋旅館に投宿	
大正11年 1月23日	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一	宇和島発、同夕白杵に入港、元井旅館に泊る。今遊は門前を探訪せんと存候。	*市島春城宛書簡
1月24日	書簡(巻8)	會津八一	橋本閣書は兩3日前に当地にまいりて石仏を觀て去りしよし。 白杵の石仏は天下に冠たるべし。	*市島春城宛書簡 *式場益平宛書簡
大正11年 1月25日	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一	満月寺跡をめぐる。門前石仏見学。 「石仏私見」(地方新聞関連記事) 日本の古美術中の最も優秀なものの一つ。	*市島春城宛書簡 *元井旅館泊 『深田』
1月26日	書簡(巻8)	會津八一	写真師を伴い16枚撮影	*市島春城宛書簡
大正11年 1月27- 29日	書簡(巻8) 年譜(巻12)	會津八一	白杵図書館当事者に石仏研究上の中心たらしむよう勧告。当町役場書記の小城某と面会。太山寺を取り調べる必要。大分の新聞に意見(6点)を述べる約束。白杵より29日別府に至る。立花屋焼失のため鉄輪宿泊。	*市島春城宛書簡
大正11年	年譜(巻12)	會津八一	皮、滋賀丸に乗船、別府出帆。	*市島春城宛書簡
2月1-2日	書簡(巻8)		2日早朝伊予高濱着。太山寺十一面観音像・真名長者像を拝観願うがかなわず、絵はがきを求む。再乗船、大阪に向う。 白杵石仏写真40余種あり。機会あれば、白杵のみにて面位撮影せしめて来遊の人をして其境にあるが如き感あらしめたきもの。	

2月14日	書簡(巻8)	會津八一	歸宅翌日門下の人々小菴に会して小生を迎え、その席上にて白杵其他の報告を聴取いたす順序と相成候。其節の参考として雲岡石仏写真集(文求堂本)と支那美術史彫塑篇を拝借いたしたく候。尚ほ白杵の石仏はこれまで大同と龍門とは屢々比較せられたれども、朝鮮の慶州のそれと比較して論ずるもの尠々少きは迂闊ならずやと存じ候。小生は暫時の出遅れに遂に朝鮮に征くこと能わず、実地踏査することを得ず。	*市島春城宛書簡
2月(日不明)	書簡(巻8)	會津八一	四国より九州再遊、2月17日京に歸來。経歴したる仏刹數十、過眼したる佛像数百、道人近來の一事業。諸仏の功德によるが故に、健康亦頗る復旧。乃ち装いを改め、近く再び奈良に向かひて発せんとす。古都の連山吾を見て、大いに笑ふべきや、否や。	*今井安太郎宛書簡
3月7日	書簡(巻8)	會津八一	石仏の写真の整理など、淨瑠璃寺の石仏、壺坂寺の石仏、柳生の石仏、多武峰の石仏、……只今の小生には只だ石のほとけの先づ心をひくのみにて候。	*坪内逍遙宛書簡
4月10日	書簡(巻8)	會津八一	濱田博士九州より音信有之、白杵の石仏調査にゆきて、あちらにて小生の噂をききて挨拶の一通にて候。	*坪内逍遙宛書簡
大正11年4月		濱田耕作 澤村専太郎	豊後石仏調査	『深田』
大正11年7月5日	年譜(巻12)	會津八一	*早稲田中学校教頭辞任	
大正11年7月		白杵	地元で白杵石仏保存会を組織	『深田』
8月中旬	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一	市島春城の別荘閑松庵に移る。転居に伴い閑松庵を秋岬堂へ改称	*今井安太郎宛書簡
大正11年8月		東大工学部長・塚本靖 鉄道省史蹟調査嘱託・小此木忠七郎	白杵石仏視察	『深田』
大正11年9月		内務省史蹟調査会委員・黒板勝美	白杵石仏視察	『深田』
大正11年10月		西本願寺管長・大谷尊山	白杵石仏視察	『深田』
大正11年10月27日	年譜(巻12)	會津八一	夜行にて奈良へ行く。この行はじめて正倉院をみる。奈良帝室博物館、東大寺転書門、北山十八間戸、般若寺、不退寺、海龍王寺、法華寺、薬師寺、唐招提寺、喜光寺、法起寺、法輪寺、中宮寺、夢殿、法隆寺、東大寺、三月堂、新薬師寺、河内観心寺等を巡拝。奈良にて日吉館と小川宅泊。大阪にて伊達宅泊。	大泉博一郎随行 *坪内逍遙宛書簡

大正11年 11月13日	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一	11月13日、帰京	* 今井安太郎宛書簡
大正12年 1月15日		田邊孝次	「新発見の大分の石仏」	『美術月報 232』 美術月報社
大正12年 3月	年譜(巻12)	會津八一 小野玄妙	「奈良美術研究会」創設、会長へ。毎月1回 秋仲堂にて例会開催。 「大分の石仏に就きて」	帝国美術院(非売品)
大正12年 8月1日		内務省史蹟考査 員・荻野伸三郎、 田沢金吾	白杵石仏調査	小城『深田の石仏』
大正12年 8月20-30	年譜(巻12) 書簡(巻8)	會津八一	奈良小川晴暘宅を本拠とし、安藤更生、板橋 倫行、小川を伴い室生寺の仏像撮影。30日 帰京。	* 式場益平宛書簡
大正13年 1月		京大・松本文三 郎	白杵石仏調査	『深田』
大正13年 2月1日		岡田三郎助 田邊孝次	「大分及佐賀県の石仏」 「新発見の竹田の石仏」	『國民の美術 242』 國民美術協会
大正13年 4月		大阪毎日新聞記 者・菊池幽芳 濱田耕作	白杵石仏視察 「豊後の石仏にかんする一考察」	『中外日報』後に 『百済観音』(昭和 44年10月10日) 収録
大正13年 7月		山階宮藤齋王殿 下	白杵來臨	『深田』
大正13年 10月-12 月	年譜(巻12)	會津八一	「奈良美術に就きて」を『早稲田学報』第 356号に掲載。11月奈良美術研究会(会長 會津八一)編『室生寺大観』飛鳥園(撮影発 行:小川晴暘)刊行。12月歌集『南京新哇』 春陽堂刊行。	
大正14年 1月1日		村本(直良)信 夫	「上代に於ける歸化人の仏的活躍と豊後の石 仏との関係」	『中央史壇 58』 国史 講習会
大正14年 3月22-4 月5日	年譜(巻12)	會津八一	奈良着、日吉館泊、吉野、香具山、山田寺址、 聖林寺、豊浦寺等訪問。同月早稲田中学校辞 職。同月早稲田大学附属早稲田高等学院教 授となる(英語担当)	
大正14年 5月下旬	年譜(巻12)	會津八一	大東文化学院にて奈良見学につき講演	
大正14年 8月10日		濱田耕作	『豊後磨崖石仏の研究』	京都帝国大学・岩波 書店
大正14年 10月1日		濱田耕作	「日本の磨崖石仏像 上」	『思想第48号』岩波 書店
大正14年 11月6日	年譜(巻12)	會津八一	奈良行き、日吉館泊。この行、正倉院拝観の ほか、法隆寺東院、仏隆寺、嵐山など訪問。 この年より数珠掛鳩を飼う。	
大正14年 12月1日		濱田耕作	「日本の磨崖石仏像 下」	『思想第50号』岩波 書店

大正 14 年		九州電気工事株式会社専務取締役・棚橋琢之助	私財一千元を提供し、白杵石仏に木柵建設	『深田』
大正 15 年 3 月	年譜 (巻 12)	會津八一	奈良へ旅行	
大正 15 年 4 月	年譜 (巻 12)	會津八一	奈良へ旅行。早稲田大学文学部講師に再任。講座名は東洋美術史。	
大正 15 年 5 月 19 日	書簡 (巻 8)	會津八一	早稲田大学にて東洋美術史の講座を命ぜられ、奈良朝を中心として 45 時間講義。	* 内山義文宛書簡
大正 15 年 6 月 5 日	書簡 (巻 8)	會津八一	今春から早稲田大学にて東洋美術史の講義をたのまれ面倒くささに再三謝絶すれども押しつけられる。 濱田青陵『百済観音』表紙に歌を書く。	* 高田たえ宛書簡
大正 15 年 6 月 21 日	書簡 (巻 8)	會津八一	4 月から早稲田大学にて、印度、支那、日本の美術史を講義することと相成候。近来書物の表紙に字を書かせることが多く、坪内先先生『逍遙選集』、京都大学濱田博士の『百済観音』など。	* 山内保次宛書簡
大正 15 年 6 月 24 日		宮内庁・山縣武夫武官	白杵に出張、瑞典国王太子・同妃殿下白杵訪問の旨を伝える。	『深田』
大正 15 年 9 月 2 日			瑞典国王太子・同妃殿下横浜安着	『深田』
大正 15 年 9 月 12 日		濱田耕作	「京都府下並に奈良大分兩県下に於ける考古学的研究について」 赤坂御所にて 1 時間半御進講	『深田』
大正 15 年 9 月 13 日			瑞典国王太子・同妃殿下、日本国皇室訪問。	『深田』
大正 15 年 10 月 6 日			瑞典国王太子・同妃殿下御一行、近畿見学後、神戸から軍艦木曾にて別府へ、亀の井旅館泊。 濱田耕作・小川琢治同行。	『深田』 豊州新報 大分新聞
大正 15 年 10 月 7 日			瑞典国王太子・同妃殿下御一行、白杵石仏、大分元町・岩屋寺石仏など見学。京大教授・濱田耕作、小川琢治同行。	『深田』 豊州新報 大分新聞
大正 15 年 10 月 8 日			瑞典国王太子・同妃殿下御一行、別府発下関箱山釜山へ、豊州見学。	『深田』 豊州新報 大分新聞
大正 15 年 10 月		京都府技師・坂谷良之進	内務省特別保護建造物修理工事に関する用務で視察	『深田』
大正 15 年 12 月	* 年譜	會津八一	『南京新唱』を『仏教芸術』第九冊に発表。	
大正 15 年 12 月 25 日 昭和と改元				

以上「年譜」(『會津八一全集 第十二』は、巻 12 と略記)と「書簡」(『會津八一全集 第八』は、巻 8 と略記)を参照して筆者が作成²⁵。

ところで、前掲の一覧からも分かるように、大正十年に初めて會津は、「満月寺石仏」の写真を一見しているが、関西・四国・九州の古美術巡歴に関して、まさに大正期の會津は、極めて精力的と思える程の実地踏査を行っている。とはいえ、実は病身であったために、その静養を兼ねていた^{*26}。また、大正十一年にも伊勢・志摩・大和・中国・四国・九州と病軀を引きずり歩いたことが分かる^{*27}。

さて、會津独自の「大分の石仏調査」の契機を知るために、今一度研究史を振り返るならば、會津が大分の石仏を集中的に探訪したのは、大正十一年であり、それ以前の研究・調査の成果は、前記の白杵石仏に関する研究調査史で触れた通りである。この急激な石仏調査の活況が、とりわけ會津特有の石仏への関心や歌作りにも大いに刺激を与えたものと思われる。

Ⅲ 大分の石仏に関する會津八一の見解

1. 大分の石仏四系統

ここでは大分の石仏に関する會津の見解について、以下に順次紹介しながら見ていこう。

まず會津は総論として、大分の石仏について四グループ、すなわち大分市外の一群、竹田町附近の一群、白杵の一群、及び立石峠の北方高田町の南方なる一群に分けて考えてい

る。これは当時すでに実施されていた帝国美術院から派遣された小野玄妙・岡田三郎助等の調査地域(大分郡・大分市・大野郡、北海道郡、西国東郡^{*28})とほぼ重なる。會津はその四グループ中の一群のみを踏査しただけであるので、未だ多く論ずる資格のないこと、また石仏造営が仁聞や日羅と関わるという伝承にも言及しているが、會津は冷静に考えており、「尚ほ充分鑑考の余地有」と慎重論をとる^{*29}。以下に會津が、探訪した上で自ら見解を述べた大分の石仏群について、すなわち元町石仏、高瀬石仏、白杵石仏、竹田付近(菅尾)石仏の順に紹介する。

2. 元町石仏

會津は、漠然と元町石仏群は三〇余体と指摘するが、それに関しては、次のように注意を要する。會津の言う「元町石仏群三〇余体」は、現状をじっくり観察して判断するならば、いわゆる岩屋寺石仏群と元町石仏群とに分けて考える必要がある。よって遺蹟の現状から尊名がかるうじて確認できる十一面観音像の残存する場所は、前者に属し、一方、丈六薬師如来を中心とする場所は、後者に属す。

まず元町石仏群から見て行こう。會津は、薬師如来(大日説のあることもあげている)の(向かって)右側に金剛力士(首と手を欠失)が配置されていると指摘しているが、元町石仏群において、現在尊名が比定できるものは、薬師・

不動群（不動・矜羯羅童子・制多伽童子）・多聞天群（多聞・吉祥天・善膩子童子）のみである。それ以外は會津も「面相印相の明かなるものは極めて寥々たるものにて候^{*30}」と指摘するように、破損・摩耗などにより尊容が確認しがたい。よって會津の言う「其他全形は略々備はれども眉目手足悉く朦朧として識りがたき坐像數軀^{*31}」とは、この薬師を中心とする群像の向かつて右隣に配置された甚だしく破損した群像を指すものと思われる。ちなみに會津が「其首は断絶して落下せしものを傍らに侍立せる童子の頭上に載せられたる不動明王もあり^{*32}」と指摘する状況は、明らかに工藤撮影の写真においても、それが確認される。

岩屋寺石仏群は、現在も十一面観音像の確認される場所であるが、それに関して會津はこう述べている。「最近に（恐らくは奈良の工藤の撮影せし後）欠け落ちたりと思はるゝところ數個処あり。其かけたるところをみるにまさに塑造なり。試に指を触るゝに指にしたがひて落つ。たとへば硫黄末の如し。あまりの惜しさに身もよもあらず存候へども如何とも致しがたく候^{*33}」。この場所の群像は、會津には塑像同然と見えたようであるが、まさに粒子の細かい砂岩に彫られており、その時から今なお崩壊の一途をたどっている悲惨な状況にある。

ちなみに會津は、上野の石仏群（岩屋寺石仏と元町石仏を含めた総称）に関して、尊名・形状・歴史的環境・伝承等を次の様に記している。

「（前略）上野の石仏群の如きは此県のあらゆる印刷物に薬師如来及び十二神将など、申候にや。いかに破損したればとて頭髮の結び方をみてもわかりさうなものと存じ候。一二のものを除けばみな菩薩形なり。此種類の調査にては心もとなきかぎりにて候。上野は古国府に隣接し、円寿寺と称する寺（一名岩屋寺）こゝにありしよしなれば、此所の此群像の存するは無理ならず候。日羅の此地を過ぎたることも信ずべしと存候。此附近尚ほ宝戒寺といふ真言の寺あり、古刹と称し大日如来の稍可なるものあれども、作は藤原以降のものにて候（後略）^{*34}」。

以上の様に會津は、上野の石仏群としてひとまとめで言及しているが、周辺の地理的歴史的環境や近隣の伽藍を含めて広い視野で考究している。なお岩屋寺は、薬師・二光仏及び十二神将像を安置した霊場として円寿寺の旧地にあつて、日羅により作られたという伝承があるが、上記において會津はこの説を踏襲している^{*35}。また現在、宝戒寺の大日如来坐像（胎藏界）は、文保二（二三二八）年康俊の作であることが指摘されている^{*36}。

3. 高瀬石仏

會津は、高瀬石仏の配置と尊名についてかなり立ち入って言及している。すなわち、會津は、五尊の配置に関して中央に大日、（本人から見て）最右端に降三世明王という

が、今日の説では最右端は馬頭観音である。また（本人から見て）大日像のすぐ右隣は、六臂の如意輪観音と見ており、これは今日でも首肯される。なお、六臂の如意輪観音の類例に関して、會津は大和室生寺と河内観心寺の二例を挙げて、本邦にて稀有ものとして述べている^{*37}。

一方、（本人から見て）大日のすぐ左隣については、順当に儀軌を踏まえて大威徳明王と断定している。また會津はその最左端の像について、金剛夜叉と見るが、像容について図像との照合を踏まえて判断すれば、明らかに深沙大將像である。この時、會津の図像認識は間違っていたが、後日改めて深沙大將像と訂正を行っている^{*38}。

なお高瀬石仏の窟前手前の岩壁に一根三莖蓮座上に安置された三尊仏が確認されるが、これについて會津は、橘夫人厨子の三尊と類似すること、さらには奈良の頭塔石仏にその例があることを指摘している。しかも、その所在地に注目しながら、玄昉の死せる場と葬られた所であり甚だ奇と見ている^{*39}。

上述の一根三莖蓮座三尊仏については、確かに大分県では極めて珍しい作例であるが、少し踏み込んで考えて見れば、すでに触れた岩屋寺石仏群の向かって右脇に遺存するいわゆる千仏龕の作例とも関連性が強いものである。すなわち、會津が指摘している橘夫人厨子中三尊仏にも検出される千仏構成との相関性が認められる。會津は「此種の印度様を帯びたる図取は必ずや玄昉等の唐より見習ひ来りし

ものに外ならざること略々論無き所と存じ候^{*40}」と言及しているが、確かにこのような様式は、飛鳥・奈良時代に確認される同様の作例との近似性が強く感じられる。これは白杵石仏群に検出される、いわゆる裳懸座形式の採用という問題とも関係しており、要するに飛鳥・奈良朝に発達した古典的様式の復古的展開が、平安期の大分の石仏造営においても検出されることは、極めて興味深い。

4. 白杵石仏・門前石仏

現在、白杵石仏も門前石仏も、いわゆる白杵石仏群と考えられている。この時の會津の発表に先立ち既に大村西崖、中村不折、小野玄妙・岡田三郎助等⁴¹が大分の石仏についての調査研究を行い、それぞれの見解を発表していた。例えば小野は「大分石仏中において爛熟期の優秀な作品⁴²」と高く評価している。

ところで會津は、白杵石仏群について、まず満月寺遺蹟として次のように紹介している。とりわけ「(前略)本邦のあらゆる他の石仏像を悉く失ふも此一ヶ所にはかへがたき念なきを得ず。其数の多きのみならず其技の秀抜なる、木仏といへども他に比すべきもの少なかるべきを思ふ(後略)⁴³」とその特殊で優秀なる様に言及し、さらに「(前略)白杵の石仏は天下に冠たるべし。それをわすれかねてまた遠く来りしにて候⁴⁴(後略)」と最高級の賛辞を捧げている。

また會津は、弘法大師以前の密教との関わり及びその特殊の価値のあることについても次の様に言及している。すなわち「(前略) 弘法大師以前にすでに密教の顯著に渡來せられありしことを認めざるを得ず相成り候。此の意味のみにても白杵のもの及び其他大分県下の既見の石仏は特殊の価値あるものと存じ候(後略)*45」。ここで會津は、既に発表されていた大村説に立脚して判断している。すなわち、大村は、古園石仏群の不動明王像に着目し、これらの像は密教渡來以前の儀軌の未定であった頃の造立と見た訳であった。ともあれ、會津は先学の説に導かれつつ平安密教以前の展開について述べているが、残念ながらこの説は現在では支持されない。この時、會津は自ら写真器もその撮影技術も持たず、遺憾の念を示している。ちなみに、大正十年、門前石仏については、望遠したのみであったが、翌年には、探訪を果たしている*46。會津は、その破損風化した尊像群、とりわけ中尊について、後の濱田耕作説同様に大日像(中尊を大日とし、両脇に阿弥陀・釈迦を安置*47)と見ている。會津の大日説は、大正十一年に発表されたが、これは、阿弥陀三尊像と見る新納説*48より後に呈示された見解である。

ちなみに會津は、門前石仏について「(前略) 大日如来三尊と不動明王三童子の六軀をも見候。三尊は甚しく破損風化して見るに堪へざれども、不動は尚ほ形態を存し居候(中略)。これは(中略)、何事も儀軌以外に一步をも踐み

出しかぬる後世の密教の僧侶、若くは仏師とは多少異りたる自由の芸術觀を有したる人の作なるを推知すべく候(後略)*49」と言及している。この門前石仏は、現在いわゆる白杵石仏群とは少し離れて白杵前田地区の畑地の磨崖部に存在するが、広い意味では現在も白杵石仏群の一つと見られている。

ここでやや立ち入って會津の研究態度に言及するならば、この時初めて写真師を使って石仏写真撮影を実施すると同時に、一方金石史料として極めて重要な板碑に強く関心を示している。しかし、大分県において、当時あまり金石文研究の進んでいない状況が窺われる。この金石文研究は、拓本資料の収集とも関係するが、會津の特色をなす三絶、すなわち「書」「和歌」「美術史研究」とともに、特に注目しておく必要がある。そのような意味では、白杵石仏地区においてとりわけ意義深いことは、金石史料の発見。すなわち一石五輪塔二基(図版一参照)、それぞれに承安二年銘、嘉応二年銘が確認されたことである*50。

ところで、會津は白杵石仏に関して以下のように独自の見解を六点にまとめている。

これは、当時、白杵町役場の小城書記から求められて講演の要望に対して、講演ではなく地元新聞にて意見を述べる約束に基づいたものである。すなわち

「(前略) 小生の石仏に関する意見は(一) 大分県のものに限らず、磨崖の石仏の国宝は先例なきにより、これも国

宝にはあらざるべし。(二) しかしながら国宝以上の美術的価値あり。(三) 政府の保護金は僅少のものなれば、進で縣費数万を支出して保存のために費せ。(四) 修繕は決して加ふべからず。(五) 保存に先ちて今一応破片の大搜索を試みよ。(六) かくして得たる総ての破片は悉く屋内に移して保管すべし。これ風雨の難及び盜難を避くるのみならず、又鑑賞上にも研究上にも便利なりといふ六点に歸し候。極めて平凡なるが如くにて候へども、大分県の当事者及び有志者がかくの如く実行し得ざる場合には、此意見も事実上平凡ならざりしことに相成るべく候。石仏の寫真ハ小生の携帯して歸京するもの四十七枚と可相成候(後略)*⁵¹。

今日、白杵石仏のみが日本の石仏の中では唯一国宝指定を受けている。當時も磨崖の石仏の国宝指定は先例がなかった訳であるが、早くも會津は、国宝以上の美術的価値ありと断言している。これはまさに先見性をもつ卓見である。保護金についても縣費を支出し保存に費やし、修繕は加えないことを訴えている。さらに保存に先立ち、破片を収集したものは全て保管することを説いているが、これは災難・盜難を避けるのみならず、鑑賞と研究にも便宜をはかるべきことを明記している。自ら平凡とは言いが、県当事者への喚起と実行を求めている。以上のようにまさに會津ならではの独自性が認められ、今なおその意義は失われ

ていない。

ちなみに會津は、この時の石仏の写真撮影がかなり上出来であったこと、さらには白杵の図書館に対して、仏教美術研究の参考書を多く備え付けて、この地方の石仏研究の中心たらしむようと勧告を行い、また真名長者伝説との関連から伊予高濱太山寺を調査する必要が生じてきた旨を述べている*⁵²。しかし後日、太山寺にて十一面観音八体及び真野長者(炭焼き長者)像の拝観を許されず、絵ハガキのみを求めただけであった*⁵³。

5. 竹田付近石仏(菅尾石仏)

白杵地方と同様に大野川沿いの地域は、大分における石仏の宝庫である。會津は次の様に多数石仏の存在することを述べている。すなわち「(前略) 本日はまた石仏見学のため出遊のつもりにて候。竹田町附近と心ざし候。だんだん調べ候ところ、あまたあちこちにありて困るほど多数に御坐候(後略)*⁵⁴」。特に菅尾石仏は優秀さにおいて有名であるが、それについて會津は、現在の認識と同様に向かつて左より順に ①千手観音 ②薬師如来 ③阿弥陀如来 ④十一面 ⑤多聞天像が確認され、五軀ともに高さ一丈前後、その顔面の表情は、大分市上野丘の薬師像に似ており、同作と見ている。当時いわゆる岩権現という伝承に対して、当地で誰彼と尋ねても知らず、ついに會津は一見「山王な

らずや」と言及したが、現在では隣接する熊野権現との関連から、その本地仏と見ることが出来る。すなわち、それぞれの本地仏は、新宮速玉神は薬師、本宮家都御子神は阿彌陀、那智神社夫須美神は千手観音、若宮天照大神は十一面観音、十二所権現（米持童子）は毘沙門天と対応する。ちなみに、この時の會津の心境は次の様に興味深い。

「(前略)九州の探訪も恐らくは今回が最初にして最後なるべしとの感あり、今生の見納め的に大奮発いたし候次第に御坐候(後略) *55」。

当時は交通の不便な地域であったが、たとえ交通の便利な今から見ても、まさに今生の見納めというべき大奮発にふさわしい大旅行であったと言える。

なお會津は、この地域に石仏が多く見られることの理由について、奈良地方と比較して次のように言及している。つまり「(前略)竹田より犬飼に至る間は地勢殆ど此図にみるが如く、至るところ断崖絶壁に有之候へば、自然と石仏も多きわけにて候。奈良の地獄谷の少しばかりの岩をも見通すことなく彫刻したる、当時の人々の此大分県地方に於て感じたる満足は察するにあまりあり候 *56 (後略)」と大分における磨崖石仏の特色について端的に触れている。

IV. 大分の石仏と関わる学者・文人たちと會津八一

1. 橋本関雪等の白杵石仏訪問に対する會津八一の見解

当時、大分の石仏、中でも中央からの白杵石仏への来訪者が急激に増加している。とりわけ学者・官僚・文人・宗教家等の相次ぐ探訪が目立っている。會津は、橋本関雪をはじめ毎月毎週何人かたづね来て、現地では異常の興奮状態に様子となっていること、またその都度出される相異なる諸説に興味を抱き、さらには独自の見解をも述べている。すなわち

「橋本関雪は兩三日前に当地にまゐりて石仏を觀て去りしよし、その意見といふものを新聞紙上にてみるに、此石仏群を以て貞観頃のものとなすが如くにて候。小生とても単に様式の上よりみるならば弘仁貞観頃とは存じ候へども、いろいろ睇関したる仏教上の問題も控え居ることにて、此際相争て時代を定むるに急なる必要もなかるべきにあらずやと考へ居り候。真名長者之伝説につきては写本をつくりて帰京の際持ちかへりたきものと存候。写真も少しく手に入れておくべき候。前回の御浴泉の際に先生の此地に遊ばれざりしことは、いまだながら遺憾に存候。徳川頼倫侯(數年前)本岩屋へ正木校長を初めとして毎月毎週何人かたづね来ることにて、地方人は上下とも異常の興奮状態の有

之、來訪諸家の説の逐一相異なるをきいてますます興味を感じ来るかの如くにて候。小生は朝鮮を知らず、支那をしらざるものなれば、此問題にはむしろ客観的に候へども、ともかくにも『日本的ならず』といふ点には自信を以て断定する一人に有之候(後略)⁵⁷。

以上、引用がやや長くなったが、會津は、橋本説に關して即断を避ける賢明な態度をとる一方において、さらに踏み込んで「日本的ならず」という断定を行っている。ここで會津の指摘する「日本的ならずといふ点」について、具體的な例を挙げて卑見を加えるならば、まず石仏群の規模や岩屋(石窟)式構成、次に裳懸座などが付随する特色からも支持することができる。すなわち換言すれば、石窟・裳懸座の淵源をたどれば自ずと「大陸的性格」が検出される訳であり、會津はその具體的根拠を明示しないが、現状から客観的に判断しても十分首肯できる。

會津が記すこの他の訪問者に、徳川頼倫と正木直彦の二人がいる。前者は、紀州徳川家第十五代当主であり、徳川は市島謙吉「日本図書館協会第三代会長。明治三五(一九〇二)年早稲田大学初代図書館長就任」や和田万吉「日本図書館協会第二代会長」らの推戴で大正二(一九一三)年日本図書館協会初代総裁に就任しており、また、史蹟名勝天然記念物保存協会にも関与した⁵⁸。徳川がわざわざ白杵石仏を訪問した契機は、この日本図書館協会を介した徳川と市島との関係にあるものと思われる。実際、市島へは

會津から白杵石仏に関する書簡が頻繁に送られているので、その噂は市島を介して徳川の関心を誘ったものと推測される。

ところで後者は、明治から昭和初期の美術行政官。東京美術学校の第五代校長の任に明治三十四(一九〇一)年から昭和七(一九三二)年まで長期勤続した。大正八年帝国美術院が設置されて文展が改革され、帝国美術院展覧会(帝展)が開かれると、正木はその幹事を務め、昭和六年帝国美術院院長となった。なお明治二十六年奈良県尋常中学校校長の職に就任し、在任中は帝国奈良博物館学芸委員、奈良県古社寺保存委員を兼務した⁵⁹。

なお正木が東京美術学校校長であった間、大村西崖や岡田助三郎らは共に同校教授の任にあり、大分の石仏調査を実施していた。また正木が帝国美術院幹事を務めている間、岡田は石仏調査に派遣(大正十年八月、小野玄妙と同行)されている。よって、正木の大分の石仏訪問はその関心の高さを示すものと言えよう。

2. 會津八一の石仏研究に関する態度

會津は九州の石仏歴訪を終えて、調査の成果について帰京報告するにあたって、参考とすべき関連書籍の拝借を市島春城に依頼している。すなわち『雲岡石窟写真集(文求堂)』と大村西崖『支那美術史彫塑篇』の二件である。な

お會津は、白杵石仏が雲崗（大同）・龍門の兩石窟と比較されることは、しばしばあつても、慶州の石仏との比較で論ずることの少ないことについて、自身も实地踏査を踏まえておろす迂闊と考え、市島が実見した際の印象を伺いたい旨を述べている*60。

ところで會津は、関西・九州への石仏巡歴のまとめとして、歴訪した数々の石仏の写真整理について、感慨深げに坪内逍遙にて次の様に述べている。

〔前略〕淨瑠璃寺の石佛、壺阪寺の石佛、多武峰の石佛と、他人ならばほかにもいろいろの聯想あるべき土地も、只今の小生には只だ石のほとけの先づ心をひくのみにて候（後略）*61。

以上のことから、石仏研究を精力的に進めながら、さらに国内外との比較研究へと一層深入りする會津の姿が見える。そもそも、この時期の會津の関西・九州紀行の本心は、「半年自行程数千里*62」と自ら述べる長期にわたる病身保養のための国内遍歴であつたが、大正十一年春新学期前、會津は遂に次のような平教員としての服務の決断を坪内逍遙に示している。

〔前略〕早稲田中学校教頭としても何一つ為しいづることもなく（中略）責任の地位に在るものひとり安逸致し居るやうにては、全校の綱紀も弛緩致し候こと最も恐縮に堪えず候。依て新学年からは一平教員として教場の労役のみに服し、課外の時間は病身保養のため

に恩賜を辱う致し度候。（中略）以後平教員としての待遇のもとに、平教員として服務致し候こと承認被下度奉願上候（後略）*63。

3. 濱田耕作と會津八一

後年の大正十五年會津は、濱田の『百濟觀音』に題簽を揮毫し題歌をも与えている關係にあり、濱田に関して次の様に敬意を述べている。〔前略〕周到なる学者にて絵も写真も出来、すべて骨を惜しまぬ研究家として拙者も平素尊敬いたし居候ところ也（後略）*64。

この年より少しさかのぼる大正十一年のこと。會津の金石・拓本収集は有名である。そのことに關する事柄と濱田の白杵石仏調査の様子が窺える箇所が次の書簡に見える。

〔前略〕昨日は五峰、春城兩老に誘はれて帝國大学にて拓本の展覽会を見物いたし、某所にて晚餐を共にして大に例の印論を闘はしなど致し、かゝることにて気分も大によろしく相成候。帝大の拓本は常盤博士の将来するところ、其講演をきくに何の見識も暗示もなく、羨ましきはその健康と啓明会の補助金八千円のみにて候。本日は御書面と同便にて京都の濱田博士九州より音信有之、白杵の石仏調査にゆきて、あちらにて小生の噂をき、て挨拶の一通にて候。魂は或は支那に飛び、或は九州に飛び、或は奈良に飛び、或は鎌倉から御地

方に飛び、或は遠く奥野細道に飛び去り候へども、たゞうつらうつらと暮らし候のみ（後略）⁶⁵」。

ちなみに大正十一年四月濱田は、澤村専太郎を伴い白杵石仏の調査を実施している。ちょうど同年一月會津は地方新聞にコメントを寄せているので、おそらく濱田はその噂を聞きつけ一目置く態度を示しているものと思われる⁶⁶。

ところで、当時最新の西洋の研究方法を取り入れた濱田の美術史研究における様式論に関して、會津は以下のように触れている。すなわち、先史考古学を除き美術考古学の研究、とりわけ日本美術史の研究においては、様式的考察が単純に陥らざかつ希薄に流れないようにするために、文献の威力を借りる方法を提起している⁶⁷。換言すれば會津は、考古学が、主として様式による觀察に重き置くことに一応の理解を示しているが、文献の豊富な美術考古学や美術史となると、決して様式のみでは断定できず、むしろ文献を活用すべきであると考えていた訳である。

V. 會津八一の美術史学的方法論

會津の研究方法の特色としてよく挙げられるのが、「文献と実物とを車の両輪と考えること」である。次にその類例となる一文を任意に一つ示しておこう。すなわち

「(前略) 文献も、そのものの作られた時代を去ること遠からざる時代に成るものは非常に役立つが、又よし

実物が今保存されていても、その当時に於ける有機的な生きた姿に於いては文献によらなければならぬ場合が多い。例えば今法隆寺があつても之が建てられた時代に持った社会上の位置も Function も既に滅びていて今の実物からは知ることができない。そこで、文献はその数多いなから出来るだけ都合のよいものをえらんで用いてゆかねばならぬ。時としては実物が失われて文献のみによらなければならぬ時がある。之は已むを得ない時であつて決して喜ぶべき事ではない。けれども美術の全分野にわたつて実物が一つしかなくてかげがえのない事は往々にしてある。然し乍ら幸にも之に類する処の実物があるからこそ、之を参考として文献によつて推定をなす事ができる。然し時代がずつと隔つて之に類する遺物もなく又同じ実物に対する文献も数多くはなく、そしてその文献の書き記された時代が、その事柄の又は製作の時代に隔りある時は之を信頼しない事が今日の科学的方法である（後略）⁶⁸」。

上記において會津が力説したことは、実物と文献を用いて研究を行う場合、その両者に対する厳格な史料(資料)批判を加えた後に、はじめて両者は、研究上より客観的な史料(資料)価値を持つ、ということである。

一方、會津は様式と文献と主觀の關係についても先述の濱田の様式的研究を意識しながら、それとも異なる會津独

特の方法論を示している。すなわち、美術の変遷について、會津は分かりやすく、気候、心理、人情風俗の変遷に喩えて説明している。そして、今の学者は、様式その物の本質のみならず、文献の存在を知らず、あるいは、解釈を知らず、唯自分一個の主観的判断を全面的に信頼する。よって、もとより主観的である以上、他人の主観とは必ずしも一致しない*69、と言及している。

上記の主観的判断に関して今暫く触れるならば、會津は別にこうも述べている。つまり

「(前略)鑑賞態度を基礎として考えるならば、美術史はこれを読む人の時代的な移り変わり、或いはその人の特殊なる立場によつて変わらなければならぬ。美術家を目して好いとか悪いとかいうこと、また美術品を美術的なりとか然らずとかいうことは、もとより主観的な判断である。それ故に同じ時代の美術史家でも、遠き上代は暫く置いて、やや豊富に材料の求められる時代を論ずるにあたっては、その歴史家の立場と意見が異なるに従つて、傑作と然らざるものとがまちまちであつてよろしい。これが傑作だと甲がいうものを、乙は凡作または駄作だと云つてもよいわけである。これは主観的判断を基礎にするからである。しかるに美術史家の主観的判断のみならず、学術的研究の進歩に伴つて新発見が行われ、また社会の美術的趣味の変遷によつて先の時代には全く価値を認めなかつたもの

に、新に大いなる価値を認められる事も生じ得るのである(後略)*70。」

ところで、會津は、大正十一年十一月臼杵石仏を再遊し、比較的落ち着いた気持ちで調査した際に「研究よりも芸術鑑賞の方を優先」すること、また例えば、創建当時のままの極彩色を愛するのか、あるいは経年変化した現状を好むのか、のいずれの立場にあるべきなのか、要するに「建築、絵画、彫刻は何時を以て鑑賞に最も適切とはすべき*71」なのか、今日でも極めて重大で不可避の複雑微妙な問題について述べている。その点、次の修復に関する見解にも、會津の極めて優れた先見性を見いだすことができる。

「(前略)分らないことはそのうちに分かる日まで、つとめていい加減な想像による復元を軽々しくしないやうにつとめることである(後略)*72。」

これは、後年ではあるが、昭和十六年に中村忠生が取つた講義ノートから収載した「東洋美術史」の阿房宮に関する出土品について言及した箇所で見られる。今日でもその意義を十分に保つた修復に関する至言である。

終わりに

前掲のように會津独特の「美術史学における実物と文献は車の両輪である」と主張する方法論に関して吉村怜は、明快であり正論であると指摘している。すなわち、重要な

ことは會津の説いた「正しい文献論と、正しい実物論」のあり方であり、それゆえ、実物を子細に観察することの重要性と文献を子細に涉猟することの必要性に言及している⁷³。

ところで大橋一章は、大正十五年以前の會津の美術史学研究が、ある水準に達していたことについて、次の様に言及している。すなわち「會津は、師なくして、独学で美術品に対する審美眼や鑑識眼を醸成させ、東洋美術史の研究方法をマスターしていたことになる。大正十五年から早稲田大学文学部の講師として東洋美術史を講じているから、それ以前に會津の美術史学研究はある水準に達していたのである。(中略) 大正十五年以前の研究論文というものはない。しかし、奈良美術が何たるは「奈良美術に就いて」(『早稲田学報』三五六号・大正十三年)で語り、美術史学の方法については「実物尊重の学風」(『早稲田大学新聞』大正十五年七月一日)で論じている。また奈良美術研究のための美術資料として、自ら発掘した小川晴陽(＊実は暢と誤植)に撮影させた『室生寺大観』を大正十三年飛鳥園より出版している。これらを見るかぎり、會津の美術史学というものはきわめて見識の高いハイレベルのものだったが、それに見合う研究論文がまだ発表されていなかったことはまことに惜しまれる。會津は研究教育資料として中国古美術を購入していたが、このような蒐集は東洋美術史を講ずる以前の大正年間にはじまっていた(後略)⁷⁴」と指

摘している(傍線筆者)。

ともあれ、傍線部に確認されるように、會津の美術史学研究は、独学で、しかも大正以前の研究論文はなくとも、きわめて見識の高いレベルにあったという大橋の指摘は看過できない。すでに本論中において見たように、論文にこそなっていないが、「奈良狂」と自称し、驚異的なほど集中的に奈良詣を実施した一時期、実は奈良美術研究の萌芽が既に検出される。このような中で、とりわけ大正十一年における會津の石仏に関する見解は卓越していた。すなわち、同時代の学者や美術家の見解にもある程度配慮しながら、しかも會津独自の見解を開陳していた。

拙稿は、大正十一年頃に會津が強く関心を抱いた「石のほとけ」の問題に焦点を当てて考察を試みてきたが、この時期はとりもなおさず、會津が本格的に美術史研究を開始する以前の基礎的段階に位置していた。よって、美術史関連の研究論文はまだ発表されてはならず、あるいはまた古美術の踏査はあれども、一纏めの報告は行っていない状況に留まっていた。しかしながら、この間に、後の美術史研究に大いに寄与し得た、見事な巡察を頻繁に繰り返しており、その開花に備えていたと言いうことができる。既に本論でも指摘したように會津は「経歴した仏刹数十、過眼した仏像数百、道人近來の一事業」と自負を語る。しかも「只だ石の仏の先づ心をひくのみ」と、その焦点の確かさと密度の濃さを加えて吐露する。この時期に「石の仏」に

特段関心を寄せていたことは、前述のように白杵石仏に関する研究史上においてもきわめて重要な段階にあつたことと密接であり、まさに會津の古美術遍歴における大分の石仏探訪は、先見の明とでも言うべく巡察であり、あたかも時宜を得ていたことになる。最後に再確認しておこう。論文発表こそないが、大正十一年における會津の大分の石仏に関する見解は、冷静にみて、石仏研究の黎明期とも言うべき大正期において、客観的に当時の研究レベルに照らして見ても独創性があり、極めて傑出していると言ふことができる。

付記

日本図書館協会設立に関わる徳川頼倫及び市島謙吉(雅号春城)について、別府大学附属図書館・石井保廣館長から情報の提供と資料の閲覧の便宜をはかつて頂きました。よつて、ここに明記致し、心より感謝申し上げます。

以下注

*1 『會津八一全集第八卷』中央公論社 昭和五十七年

三五頁「大正十一年一月二日 奈良より 東京市牛込東

五軒町三十五 市島春城宛 絵はがき(三枚つづき、厳島

神社宝物」参照。以下『會津八一全集第八卷』を『會津 八一

と略称。

*2 『日本詩人全集十六 釈道空 會津八一』新潮社 昭和四十三年 一三二頁参照。

*3 『會津 八一』三七二頁「大正十一年二月(日不明) 今井安太郎宛 封書」参照。

*4 『會津 八一』三七四頁「大正十一年三月七日 伊豆国熱海町 坪内逍遙宛 封書」参照。

*5 監修・中村元・久野健『仏教美術事典』東京書籍 平成十四年 五六頁参照。

*6 その他の事典・辞書を以下に二例紹介する。

①監修・石田尚豊・田辺助三郎・辻惟雄・中野正樹『日本美術史事典』平凡社 一九八七年 七頁参照。

「會津八一」明治十四―昭和三十一(一八八一―一九五六)・歌人、書家、美術史家、秋艸道人、渾齋

の号も用いた。新潟市に生まれ、早熟の天才ぶりを発揮し、中学時代すでに新聞俳壇の選者になったり、当時北陸旅行中の尾崎紅葉の話相手をつとめたり、また評価の定まっていなかった良寛和尚の芸術をいちはやく認めて正岡子規に知らせたりした。早稲田大学英文科では坪内逍遙の知遇を得、卒業後、早稲田中学の教師を経て、一九二六年以降、早稲田大学で東洋美術史を講じ、三十四年『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』(一九三三年)で文学博士の学位を受けた。四十五年、戦災に遭つたのを機に郷里へ帰り、二度と東京へ

は戻らなかつた。容貌魁偉、人柄も狷介孤高、かすかすの逸話を残したが、最後の東洋的文人だったことに間違いない。総ひらがなの万葉調短歌は初めから完成体を示し、『南京新唱』(一九二四年) およびそれを発展させた『鹿鳴集』(一九四〇年) は昭和歌壇の圏外にありながら昭和短歌を代表する秀歌群として聳立する。「おほてらのまろきはしらのつきかげをつちにふみつものをこそおもへ」(『鹿鳴集』唐招提寺にて)。書家としても令名高く、漢・魏・六朝以来の中国書道の伝統を貪欲に摂取しつつ独自の道人風を成就。これまた昭和書道作家を見下ろして聳立する。『会津八一全集 全十卷』(一九六八―一九六九)がある(斎藤正三)。

②日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』山川出版

一九九七年 一五頁参照。

『会津八一』一八八・一八、一〇―一九五六、一一・一二。大正・昭和期の美術史家・歌人・書家。雅号秋艸道人。渾斎。新潟県出身。早大卒。大和旅行を機に奈良美術研究を志す。一九二六(昭和元)年以降早稲田大学で日本・東洋美術史を講義。博士論文『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』。大和国の風物をよんだ歌集『南京新唱』は万葉調を借りながら独自の澄明な歌境をうちたてている。ほかに歌集『鹿鳴集』。書の道にもすぐれ、個展をしばしば開催。

*7 小川琢治の著作は以下の通り。『日本石仏小譜』大正三年。

「九州の石仏(一)」(『国華二九二号』国華社 大正三年)、「九州の石仏(二)」(『国華二九三号』国華社 大正三年)。なお『日本石仏小譜』については拙稿参照。仲嶺真信『日本石仏小譜』と小川琢治博士」(『芸術学論叢第十三号』別府大学文学部芸術文化学科 一九九九年)

*8 天沼俊一「深田の石塔」(『考古学雑誌 第六卷第十号』考古学会 大正五年)

*9 大村西崖「大分県下の古石仏に就いて」(『美術之日本 九一九』審美書院 大正六年)

*10 新納忠之助「磨崖石仏に就いて」(『仏教美術 第一卷第三号 大分県満月寺磨崖像乃研究』仏教美術社 大正十年)

*11 大村西崖「東洋美術史大観 第十五 彫刻部」審美書院 大正七年

*12 大村西崖「豊後磨崖石像 ― 帝国美術院にて調査に着手す―」中村不折「日本第一の石仏と其の保護に就いて」、以上『美術写真画報一ノ七』(博文館 大正九年)に収録。

*13 田口掬汀「泉都から磨崖仏へ」(『中央美術七一四』日本美術学院 大正十年)

*14 天沼俊一「満月寺址の石塔及板碑」、小林正義「満月寺の磨崖石仏像に就いて」、中村不折「白杵の磨崖石仏像に就いて」、新納忠之助「磨崖石仏に就いて」、これらは共に『仏教美術 第一卷第三号 大分県満月寺磨崖像乃研究』(仏教美術社 大正十年)に所収。

*15 岡田三郎助「大分石仏の系統」(『美術之日本一三一九』審

美書院 大正十年)

* 16 小野玄妙『大分の石仏に就て』帝国美術院 大正十二年。

報告をまとめ刊行したのは大正十二年であるが、実際は大正十年八月十九日から九月十一日に至る約三週間にわたり、佐賀・大分両県の石仏所在地の实地調査を行った。なおこの報告の前に次の論文がある。小野玄妙『大分佐賀両県下の石仏』大正十一年(『大乘仏教芸術史の研究』大雄閣 昭和二年) 参照。

* 17 小城長郎『深田の石仏』昭和四年(私家版) 参照。

* 18 工藤利三郎『豊州摩崖石仏 日本精華・第九輯』日本精華社 大正十年

* 19 『會津 八』二九七頁「大正十一年十月十三日 千葉県勝浦町勝浦館より 東京市牛込区余丁町 坪内逍遙宛 絵はがき(三枚つづり、南総勝浦海岸)」参照。

* 20 前掲注九参照。田口鞠汀「泉都から摩崖仏へ」(『中央美術七―四』日本美術学院 大正十年)

* 21 『會津 八』二九九頁「大正十年十月二十一日トバより東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき(志州島羽港小濱)」参照。

* 22 『會津 八』三二〇頁「大正十年十一月十九日舟中より東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき(三枚つづき、正倉院御物) 参照。

* 23 『會津 十二』三五五―三五六頁「奈良の思ひ出」参照。この対談は、昭和二十八年三月五日、同六日、同七日の三

日間、NHKラジオ「趣味の手帳」に時間に放送されたものを底本としている。ちなみに大橋一章は、学外の交友として、木内辰三郎が寒月と會津を引き合わせたこと、また奈良美術の写真を媒介にして寒月と工藤の關係についても紹介している(吉村怜・大橋一章『會津八一―その人とコレクション』早稲田大学出版部 一九九七年 五四―五五頁参照)。

なお、淡島寒月については、淡島寒月(紅野敏郎解説)『梵雲庵雜話』(平凡社 一九九九年)がある。

この著作巻末に著者紹介があり次の様に記される。

安政六(一八五九)年、江戸日本橋馬喰町生れ、本名宝受郎。父は画家淡島椿岳。明治・大正を通じての趣味家。江戸研究者として知られる。大正十五(一九二六)年没。本書上梓に際し序文を幸田露伴に、また題簽を會津八一に依頼している。

付言すると、寒月について「古美術、考古学に造形が深く、晩年は玩具収集に熱中した」ということが知られている(監修者・上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門『日本人名辞典』講談社 二〇〇三年 九五頁参照)。

* 24 『會津 八』五八頁「明治四十一年八月九日 法隆寺村かせやより 東京市本郷区森川町一番地 櫻井政隆宛 絵はがき(自筆三重塔図)」、『會津 十二』五〇六頁「年譜」参照。

* 25 年譜は『會津 十二』(中央公論社 昭和十五年) 五〇九―五一四頁。書簡は『會津 八』(中央公論社 昭

和五十七年)一四一五〇頁参照。

* 26 『會津 八』三二二―三二三頁「大正十年十一月二十一日

大分県別府町濱脇海岸立花屋別荘より 越後五泉町 式場
益平宛 絵はがき(別府アルプス)参照。

* 27 『會津 八』三七一―三七二頁「大正十一年二月二十三日

越後南魚沼町六日町 今成準一郎宛 封書」参照。

* 28 大正十年八月十九日―九月十一日の調査期間に宗教大学教

授・小野玄妙・岡田三郎助は共に帝国美術院から石仏調査
のため派遣された。ちなみに大正十年九月八日付「福岡日
日」に帝国美術院調査の記事がある(『大正ニュース事典
第五巻』毎日コミュニケーションズ出版部 一九八八年参
照)。また小野と同道した岡田三郎助は「大分石仏の系統」
(『美術之日本』三一―三一九 大正十年 審美書院)を発表して
いる。

* 29 『會津 八』三二四―三二六頁「大正十年十一月二十四日

東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき(四枚つづき

正倉院御物)参照。

* 30 『會津 八』三二三頁「大正十年十一月二十二日 別府よ

り 東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき(石仏)」

参照。

* 31 『會津 八』三二四頁「大正十年十一月二十四日 東京市

牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき(四枚つづき 正倉

院御物)参照。

* 32 注31参照。

* 33 注30参照。なお會津は、この時次の歌を詠んでいる。『會

津 八』三二四頁「大正十年十一月二十二日 東京市牛込
区五軒町 市島春城宛 絵はがき(春佳作)」参照。
「大分上野の石仏をみてよめる。

・旅人のさしてやすらぎし草花のかれてつめたきみほとけの胸
・ひゝわれし石の仏のころも手をつりてほそき蔦紅葉かな
大分より別府にもどらむとするととき函苞の濱にて潮の
色のあざやかなるにおどろきて

・山ひくゝうす紫にさしいで、藍を湛ふる函苞の海」

* 34 『會津 八』三一八頁「大正十年十一月二十八日 大分県

別府町立花屋より 東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵

はがき(三枚つづき、正倉院御物)参照。

* 35 唐橋世濟『豊後国志』巻四、享和三年(復刻版 文献出版

昭和五十年)によると、円壽寺と岩屋寺に関する記載は
以下の通り。

「円壽寺、在笠和郷律院村、紀問曰、徳治中、大友近江守
貞宗遷岩屋寺於山上、更修飾仏殿、諸堂之美、結構輪奐為
望刹、更名円壽寺、延道勇律師為開祖」

「岩屋寺、在笠和郷六坊村、紀問曰、日羅者、嘗經過于此、
翠崖崔嵬曰靈場也、遂就其窟、自刻藥師二光仏及十二神將
像、以結宇名岩屋寺、此地海近水險、乃祈禱鑿石、靈泉湧出、
呼曰関伽井」

* 36 田辺三郎助「大分・金剛玉戒寺大日如来像と仏師康俊」(『仏

- 教芸術 一九九号「毎日新聞社一九九二年」
 * 37 注34参照。
- * 38 『會津 八』三二六頁「大正十年十二月六日 別府より 東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき（正倉院御物）」参照。
- * 39 『會津 八』三二五―三二六頁「大正十年十二月五日別府より 東京市牛込区五軒町 市島春城宛 絵はがき（三枚 つづき、正倉院御物ほか）」参照。
 注39参照。
- * 41 大村西崖「豊後磨崖石像―帝國美術院にて調査着手―」（『美術写画報一ノ七』博文社 大正九年）、中村不折「白杵の磨崖石仏像に就いて」（『仏教美術第一卷第三号 大分県満月寺磨崖仏像乃研究』仏教美術社 大正十年）
- * 42 小野玄妙「大分佐賀両県下の石仏」大正十一年（『大乘仏教芸術史の研究』大雄閣 昭和二年）所収。
- * 43 『會津 八』三二九頁「大正十年十一月三十日白杵駅より 東京市牛込東五軒町 市島春城宛 絵はがき（白杵市深田満月寺石仏全景）」参照。
- * 44 『會津 八』三六二頁「大正十一年一月二十四日 豊後白杵より 越後五泉町 式場益平宛 絵はがき（豊後白杵稲葉神社）」参照。
- * 45 『會津 八』三二九―三三〇頁「大正十年十一月三十日別府より 東京市牛込東五軒町 市島春城宛 絵はがき（二枚 つづき、正倉院御物）」参照。
- * 46 『會津 八』三六二頁「大正十一年一月二十五日白杵より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵はがき（四枚 つづき、豊後白杵松島、的場山之遠景ほか）」参照。
- * 47 濱田耕作「豊後磨崖石仏の研究 京都帝國大学文学部考古学研究報告第九冊『岩波書店 大正十四年（編著・樋口隆康）復刻版・豊後磨崖石仏の研究』臨川書店 昭和五十二年）九九頁参照。
- * 48 新納忠之助「磨崖石仏に就いて」（『仏教美術第一卷第三号 大分県満月寺磨崖像乃研究』仏教美術社 大正十年）。
 新納の論文は大正十年四月十一日、一方會津の見解は大正十一年一月二十五日に発表された。
- * 49 『會津 八』三六二―三六四頁「大正十一年一月二十五日 白杵より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵はがき（四枚 つづき、豊後白杵松島、的場山之遠景ほか）」参照。
- * 50 『會津 八』三六五―三六六頁「大正十一年一月二十六日 白杵元井旅館より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵はがき（三枚 つづき、白杵公園時鐘樓ほか）」参照。
 なおこの書簡部分には、會津自筆の五輪塔に関するメモ入りスケッチが挿入されている（後掲・図版一参照）。
- * 51 『會津 八』三六七―三六八頁「大正十一年一月二十九日 別府より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵はがき（三枚 つづり、別府温泉場・鉄輪瀧湯ノ実況ほか）」参照。

- * 52 『會津 八』三六六―三六七頁「大正十一年一月二十七日
白杵より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵
はがき(二枚つづき、豊後白杵公園亀ノ首)」参照。
- * 53 『會津 八』三六八頁「大正十一年二月二日 瀬戸内海滋
賀丸より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵は
がき(豊後竹田普光寺奥の院)」参照。
- * 54 『會津 八』三三三頁「大正十年十二月三日 別府より
東京市牛込東五軒町 市島春城宛 絵はがき(正倉院御
物)」参照。
- * 55 『會津 八』三三三―三三三頁「大正十年十二月三日 竹
田街道自働車上より 東京市牛込東五軒町 市島春城宛
絵はがき(二枚つづり正倉院什物)」参照。
- * 56 『會津 八』三三四頁「大正十年十二月四日 別府より 東
京市牛込東五軒町 市島春城宛 絵はがき(二枚つづき、
犬飼町全景・豊後竹田魚住の雄滝)」参照。
- * 57 『會津 八』三六一―三六二頁「大正十一年一月二十四日
白杵町元井旅館より 東京市牛込東五軒町三十五 市島
春城宛 絵はがき(二枚つづき、豊後深田石仏)」参照。
- * 58 日本図書館協会『近代日本図書館の歩み 本編 一 日本図
書館協会百年記念』日本図書館協会 一九九三年 三〇―
三二頁参照。
- * 59 編集：白井勝美・高村直助・島海靖・由井正臣『日本近代
現代人名辞典』吉川弘文館 二〇〇一年 九六三頁 参照。
- * 60 『會津 八』三七〇―三七二頁「大正十一年二月十四日
熱海坪内邸より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛
絵はがき(二枚つづき、熱海曾我の浦観音・熱海錦浦ゴハ
ン岩)」参照。
- * 61 『會津 八』三七三―三七四頁「大正十一年三月七日 伊
豆国熱海町 坪内逍遙宛 封書」参照。
- * 62 『會津 八』三七五―三七六頁「大正十一年三月十八日
東京より 越後五泉町 式場益平宛 封書」参照。
- * 63 『會津 八』三七六―三七七頁「大正十一年三月二十二日
伊豆国熱海町 坪内逍遙宛 封書」参照。
- * 64 『會津 八』四九一―四九二頁「大正十五年六月二十五日
東京市外落合町下落合二九六より 今井安太郎宛 封
書」参照。
- * 65 『會津 八』三七九―三八〇頁「大正十一年四月十日 東
京小石川より 伊豆国熱海町 坪内逍遙宛 封書」参照。
- * 66 會津は「日本の古美術中最も優秀なものの一つ」と述べて
いる(小城長郎『深田の石仏』参照)。
- * 67 「東洋美術史講義」(『會津 一』昭和五十七年 四―五頁)
参照。
- * 68 「東洋美術史」(『會津 二』三〇二―三〇三頁) 参照。
- * 69 注67参照。『會津 一』昭和五十七年 四―五頁。
- * 70 「東洋美術史概説」(『會津 二』二六七―二六八頁。昭和
十五年度講義) 参照。
- * 71 『會津 八』三六一―三六四頁「大正十一年一月二十五日
白杵より 東京市牛込東五軒町三十五 市島春城宛 絵

はがき（四枚つづき、豊後白杵松島、的場山之遠景ほか）
参照。

* 72 「東洋美術史」(『會津 二』三〇七—三〇八頁参照)。

* 73 吉村怜「會津 八一コレクション」(吉村怜・大橋一章『會

津 八一』早稲田大学出版部 一九九七年 九四頁参照)

* 74 大橋一章「會津 八一と東洋美術」(前掲『會津 八一』

五九—六〇頁参照)

図版

図版一 白杵石仏・中尾五輪(聖)塔スケッチ

大塔：嘉応二(一一七〇)年銘

小塔：承安二(一一七二)年銘

図版出典

大正十一年一月二十六日 市島春城宛書簡

『會津 八』三六五頁

